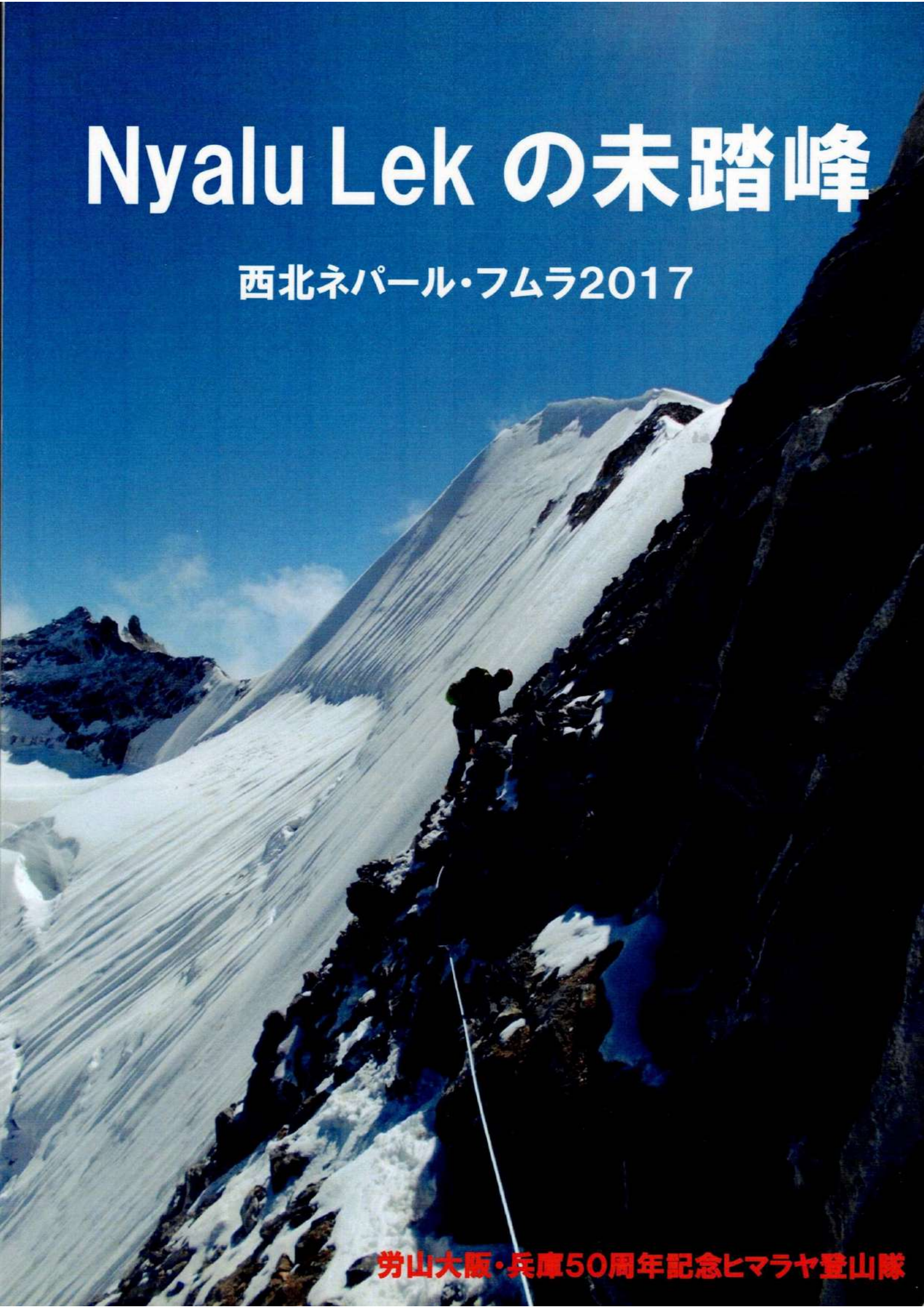
Nyalu Lek の未踏峰

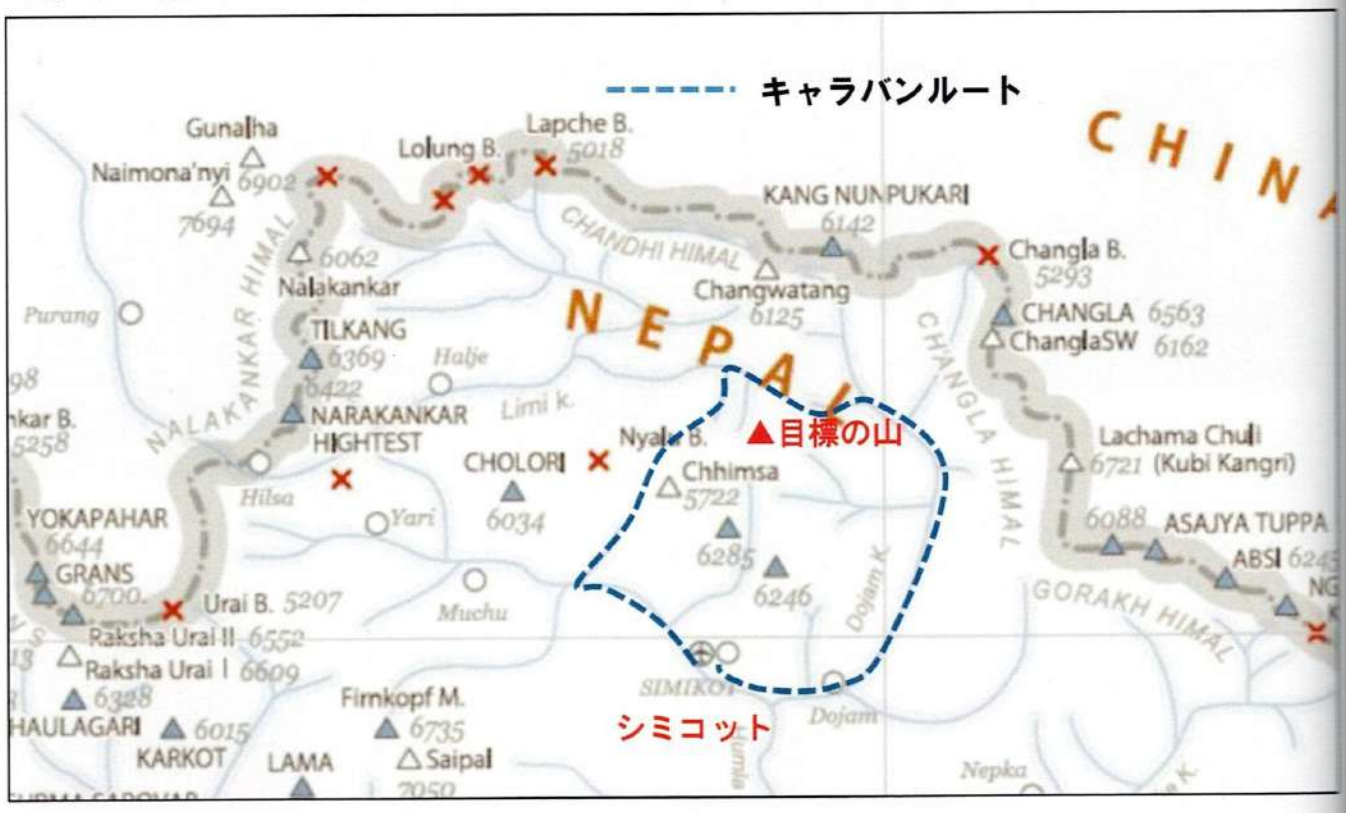
西北ネパール・フムラ2017

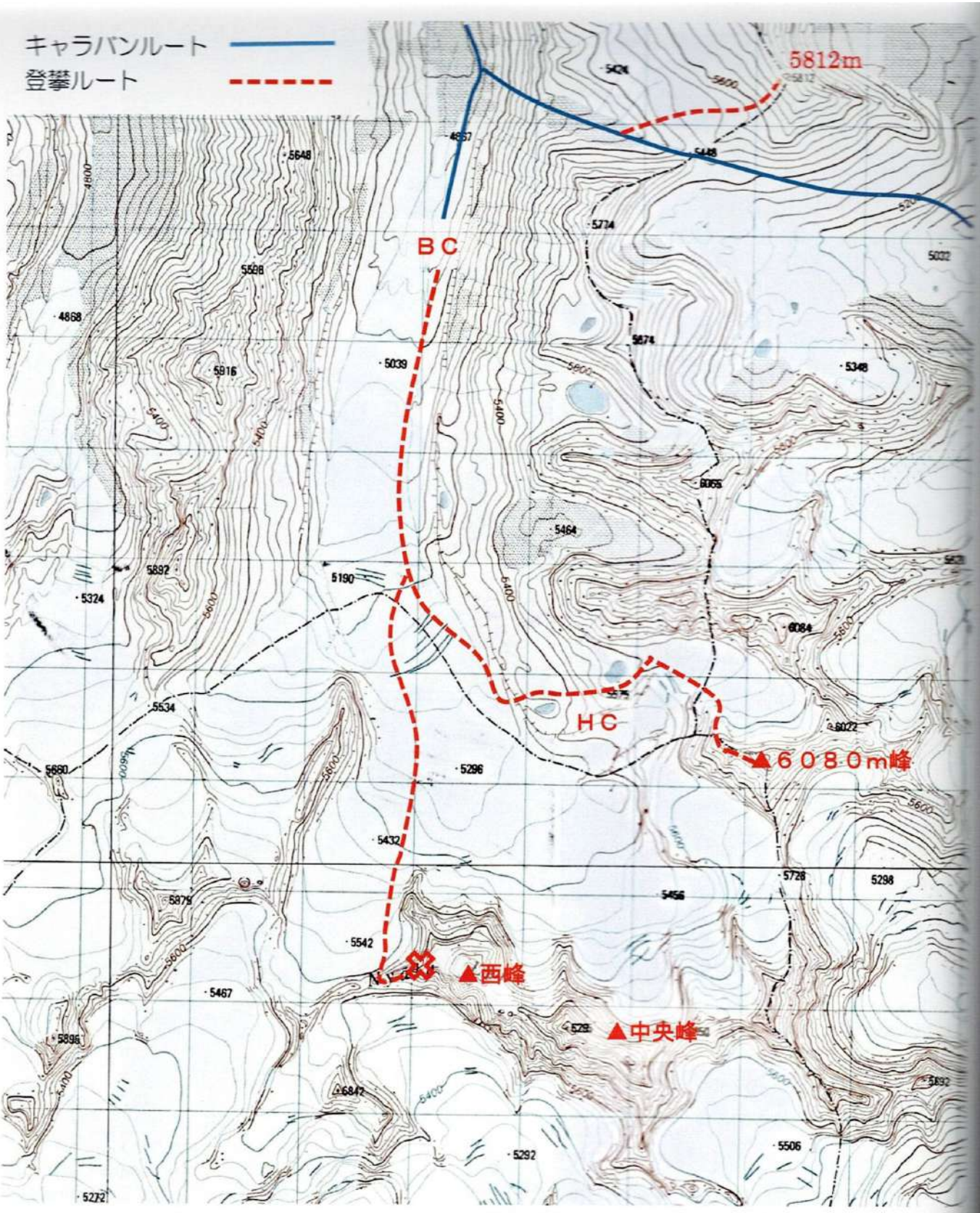


労山大阪・兵庫50周年記念ヒマラヤ登山隊

1．ネパール全図とフムラの位置

2．フムラ




キャラバンルート
登攀ルート
5812m
BC
HC
▲6080m峰
▲西峰
▲中央峰

辺境の山旅を終えて･･･諸々感じ考えたこと　　栗田昭夫

中学生３年の夏休み、私は初めて北アルプスに一人で裏銀座縦走にでかけた。烏帽子岳へのブナ立て尾根では登るペースも分からずすっかりへばった。でもそれ以来山好きになり、アルプスやヒマラヤの本を手に入れ食い入るように読みふけり、夢を思い巡らすようになったことを思い出す。今から半世紀余も前のことである。

20 歳ごろ以後、事情があって岩登り雪山などの登山は一時中止していたが、決して離れたわけではなかった。子連れ家族連れの山旅は時折行っていた。そんな中、勤務先の 20 年勤続の休暇を利用してネパールのトレッキングにでかけた。そしてこれを契機に 45 歳で大阪ぽっぽ会に入会し、登山を再開して大阪労山との関わりが生まれた。そんなきっかけもあって今回の登山隊参加となった。

2010 年からインドヒマラヤに 3 年連続で行くようになり、アラスカやネパールの山にも行くようになった。韓国や台湾の岩場クライミングにも行っていたし、知り合いとボルネオのキナバルや台湾の玉山にも行ってみた。62 歳で大阪の勤務先を退職してとても自由になった。そして住まいを神奈川県相模原市に移した。

私の心に残る海外登山は 2011 年のインド北部の最深部ともいえるザンスカールエリアだ。長いキャラバンと 6000 m級の未踏の山々。体力は衰え若い時のような力の発揮はもうできない。

今回の西北ネパールの登山隊参加は、いままでの欲求を満たせた山旅となったことは確かだと思っている。辺境がよい。不便がよい。未踏であれば言うことなしだ。

1 年前（2016 年）にエベレスト街道のアマ・ダブラムに行ったが、5900mあたりでギブアップした。高度障害というよりも日頃の不摂生がたたり、大したトレーニングもせずに登れるわけはない。改めて高所登山には十分な準備が必要であることを思い知らされた。昨年の 2 月ごろ大阪労山の中川さんからお誘いを受けた。一も二もなく快諾した。時節柄なかなか参加できる隊員の集まりも十分ではなかったと思う。このエリアの登山について、以前に大杖さんらの西ネパール登山隊の隊員募集を登山時報で見かけたことがあり記憶していた。

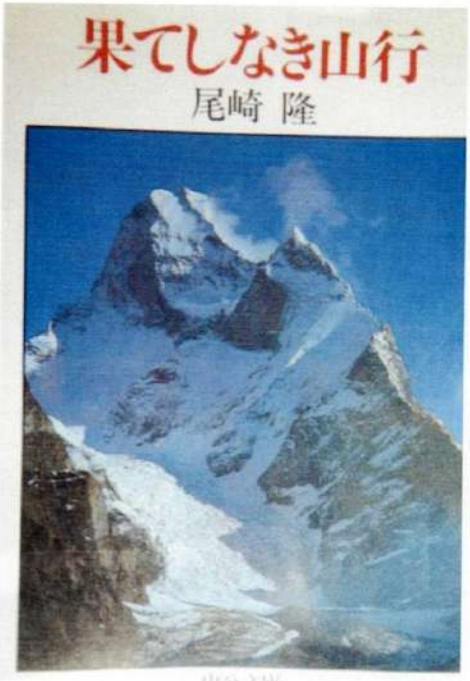
今春(2017 年)GW 岳沢合宿で痛感したことは体力不足だった。登山の基本は歩くことと攀じ登ることだ。奥穂高岳南稜を終えてから稜線までの間でへばってしまった。吊尾根でも苦しかった。若いときには残雪期だが、南稜から槍ヶ岳まで足を延ばせたのに。体力の低下を当たり前ながら痛感した。年齢のハンディキャップは大きいが、大阪労山には見本となるスーパー爺々が何人もいる。見習わなければならないと思っていたし励みもなった。出発までに歩き込むことを重点課題として、いままでになく真剣に取り組んだ。

海外登山では、無事出国できること、キャラバンスタートができること、BC に行きつけること、ハイキャンプに上がり登頂態勢に入れること、ここまでが当然のことながら成否に関わらずクリア

しなければならない必須条件である。ネパールガンジでは、空路で行くシミコットには中2日飛べなかった。小型機による有視界飛行のため天候が悪いと離陸の許可が下りない。隊荷も空路だ。シミコットに降り立ったとき、なんと辺境にきたことかと実感できた。そういうところであった。

BCまでのキャラバンはチベットにつながる交易路と一部重なった。5000mほどの峠を越えると写真でみたチベット高原を思わせる光景に出合った。4000m以上の高地でチベットのようなたおやかな地形、チベット高原の方向には蒼い空を眺めることができた。それにしても驚いたのはチベット国境から峠を越えて中国が造ったという車道だ。ダイナマイトと大型重機で荒っぽく工事を進めたと思う。軍用トラックなら走破できそうだ。中国はチベットにはない木材を手に入れることができるし、軍隊の侵入すら可能だと思った。大国の狭間にある小国の立場は微妙だ。そんなことを考えながら歩いた。

歩きながら山の本で尾崎隆著の「果てしなき山行」を思い出した。そのなかで1980年JACチョモランマ登山隊の壮行会で総隊長の西堀栄三郎氏の挨拶があり、そのなかに「異質の協力」という聞き慣れない言葉がでてきたと。生まれも育ちも違う異なった性格や個性をもった人間どうしが、いかにうまく一つの目的に向かい協力し合ってそれを達成するか、組織でのチームワークのあり方を示唆したもの。うんちくのある言葉だと思っている。頭では分かっても実行となるとそう簡単ではないと記しているが、そのとおり。それほど「我」のコントロールは難しい。高齢者が多い登山隊では頭の片隅に置いておくとよい言葉だと私は思っている。時々忘れて失敗してしまう。それほど難しい。

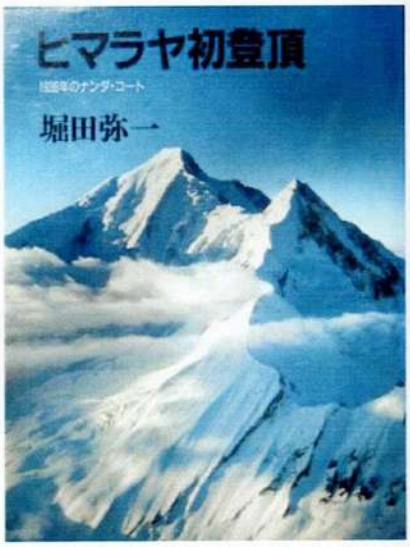


名もなき6080m峰の未踏峰は主峰から北東2.5kmの位置にあった。9月5日未明の4時半に5300mのハイキャンプを出発した。出発時にヘルメットの顎の締め部分のパーツが破損してしまい、なぜか不吉な感じがしてしまった。固定ロープが張られた雪の急斜面での標高5800m付近の単調な登行が最も苦しく、やめようかとさえ思ったが、サーダーらの励ましやザックを持ってくれたりして、何とかユマール登行を終えることができた。ミックス部分や岩場はクライミングなのでむしろ余裕が生まれた。頂上には週5日のトレーニングに励んだ山本さんらに30分も遅れて辿りつくことができた。全員の登頂であり隊員や若い登山スタッフの笑顔がここに集まった。頂上付近では雲がでて視界は不良となったが、それまでの眺望は素晴らしくチベット国境の山々を眺めることができた。これを求めてここに来たのだ。下りは疲れて先行から遅れてハイキャンプには夕方6時に帰着した。これがキャラバン中に68歳を迎えた私の登頂実態だった。多少

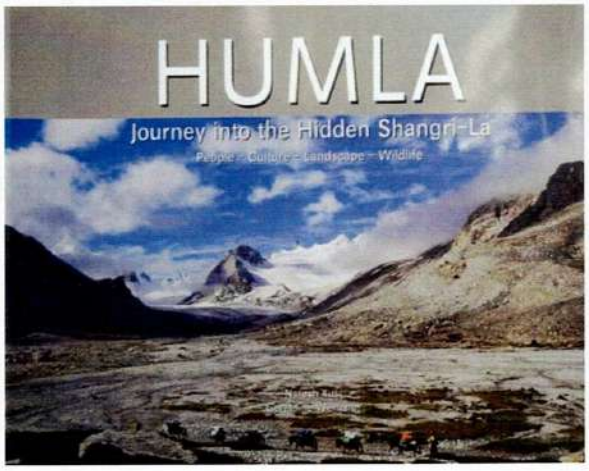
なりとも丹沢などでの真剣な歩き込みが役に立ったかなと思った。

帰路はチベット交易の裏街道といわれたルートで変化に富んで楽しく歩くことができた。蒼い空、遠くには白い山なみ、広大な放牧地、高度を下げると大渓谷と豊かな森林にも出合え、やがて集落が現れ、山腹には段々畑が広がった。チベットに隣接したフムラ地区の自然と風俗をとても新鮮に感じることができた。

カトマンズに戻ってからは、かねてから興味のあったポカラの途中にあるゴルカにひとりで行ってみた。ここはかつて勇猛果敢な傭兵グルカ兵を輩出したグルン族のふるさとといったところだ。ここはカトマンズとポカラのほぼ中間に位置する。３年前のネパール大地震の震源に近いところだ。そのときは家々がバタバタと倒れたという。18 世紀にカトマンズ盆地を制圧したゴルカ王朝の拠点でもあった。18 世紀後半にはほぼ現在の国土を確保したという。



帰国してから改めて、私の自室の山関係の書棚に目をやり関係図書を手に取ってみた。チベット関係ではやはり河口慧海の「チベット旅行記」、多田等観の「チベット滞在記」、大谷探検隊の「シルクロード探検」、リンチェン・ハモの「私のチベット」など。ネパール関係では、出版されたものは多いが、なかでも 50 年以上まえの AACK の「アンナプルナ日記」と北海道大の 1965 年「中央ネパール」などが興味深い。インドヒマラヤではなんといっても堀田弥一氏の昭和11年立教大によるナンダコート初登頂の「ヒマラヤ初登頂」がいい。高校生のとき友人から戦前に出版された毎日新聞社刊のナンダコート登山隊の本を借りたことがあった。いまでは手にすることができない。



今回カトマンズ、タメル地区の書店で手に入れた写真集は「FUMULA」　サブタイトルは Journey into the Hidden Shangri－La、Peaple-Culture-Landscape-Wildlife とあった。そう古くはないがこのエリアの貴重な写真をみることができる。今回訪れた NyaLULek 山群を私たちの BC の下方から撮影した写真が表紙に用いられていた。

次回行くとしたら中央ネパール西側に位置するドルポから西北のフムラに至るエリアが候補だと思っている。ドルポ・ムグの地図を自宅テーブルのマット下に敷いて毎日眺めている。